

Title	バークリと「経験」概念
Author(s)	中谷, 隆雄
Citation	哲学論叢. 1987, 18, p. 19-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66850
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

バークリと「経験」概念

中 谷 隆 雄

一 ロックの「経験」

経験という言葉自体、バークリの哲学的名著『原理』⁽¹⁾あるいは『対話』にあまり現れない。しかも、「ロックの哲学から経験論と整合的でない要素を取り除く」⁽²⁾「試みとされる物質論批判」⁽³⁾、抽象観念批判のコンテキストに「経験」は全く現れない。特に前者にかかわっているのは「知覚」であって「経験」ではない。

バークリはロックを批判するに際して、「経験」という語を必要としていない。それでももしバークリが「ロックの哲学から経験論と整合的でない要素を取り除いて」⁽⁴⁾いるとすれば、「経験」という言葉の意味について反省する必要がある。ロックは、経験論を提唱するとき(II, i, 2)、すべての知識は経験によって得られる、⁽⁵⁾と言っているわけではない。経験によって得られるのは、すべての知識ではなく、知識のすべての素材である。知識というのは観念の一致不一致の知覚(IV, i, 2)なので、観念が知識の素材になる。つまり、すべての観念は経験によって得られる、とロックは言っているのである。この「経験」は「感覚と内省」に置き換えることができるように思われる。⁽⁶⁾

ロックは観念を単純観念と複雑観念に分けているが、そこからもそれは言える。単純観念は感覚と内省に由来してゐる(II, ii, 2; cf. i, 3f)。(7) 複雑観念(様相、実体、関係)(II, xii, 3)も単純観念から形成される限り、究極的には、感覚と内省に由来している(II, xii, 8)からである。

「経験」を「感覚と内省」の総称と解釈すれば、バークリは「ロックの哲学から経験論と整合的でない要素を取り除く」試みを行ったことになる。不整合とは、『観念は経験によって得られる』という命題と『物質的実体は存在する』という命題の間のことである。前者が経験論であり、後者が経験論と「整合的でない要素」である。ここでは心の外に存在する物質的実体が主題なので、「経験」から「内省」は省かれる。(6) 経験論というのは、ここでは、「観念は究極的には感覚に由来する」という考え——いわば感覚主義になる。(6) バークリは感覚主義の側に立って、独自のやり方で不整合を解消する。つまり、「存在する」という言葉の意味を考察して、それが「感官によって知覚される」(8) という意味になることを発見し、*esse is percipi*(存在するとは知覚されることである)という原理を確立する。そしてその原理を物質に適用して知覚されずに存在する「物質」概念は矛盾であると宣告するわけである。

要するに、ロックの経験論の支配下に、バークリは *esse is percipi* を発見し、「ロックの哲学から経験論と整合的でない要素を取り除く」べく努めたことになる。ただ、ここまでの「経験」は「感覚と内省」あるいは「感覚」以上のものではない。ロックにはまた別の「経験」がある。それは判断と知覚の関係を論ずる箇所(10)に現れる。

例えば、均等な色の球体を前にしたとき、私達が実際に知覚しているのは不均等な色をした円形の平面である。にもかかわらず、私達は均等な色の球体があると判断する。このような判断を可能にしているのは「慣れ (*use*)」

あるいは「不断の習慣 (habitual custom)」である、とロックは言う。このことをより明確にするために、ロックは知人のモリニュークスが考察した問題を取り上げる。

「生来の盲目で現在成人のひとがいて、そのひとは、同じ金属で出来たほぼ同じ大きさの立方体と球体を触覚によって区別することを教えられ、その各々に触れたとき、どちらが立方体でどちらが球体かを言える。そう想定しよう。さらに、テーブルに立方体と球体が置かれ、そしてその盲人が視力を得たと仮定しよう。そこで問いたい。そのとき、それらに触れる前に、彼は視覚によってどちらが球体でどちらが立方体かを区別し、そしてそのことを言うことができるのかどうか。」(II, ix, 8)

この問題に対して、モリニュークス自身は次の様に答えている。

「できない。なぜなら、彼は、いかにして球体が、そしていかにして立方体が触覚に作用を及ぼすかという経験はしているが、触覚にかくかくの作用を及ぼすものは視覚にかくかくの作用を及ぼすに違いがないという経験、つまり手を不均等に圧する立方体の角は、実際立方体で現れる通りに、眼に現れるはずだという経験をしないからである。」(同) (傍点筆者、以下同様)

ロックはモリニュークスのこの答えを支持し、「読者は、経験、改善(improvement)、習得された思念(acquired notions)を少しも利用しない、あるいはその恩恵に浴さないと思っているけれども」「上の様な問題を考えることは、」とれくらい多くそれらに助けられているか」(II, ix, 8)を反省する機会になる、と言う。ここの経験には単なる感覚や内省にない特徴がある。その特徴は『知性論』のこの節から、少なくとも三つ指摘することができる。

①それは判断を可能にする。⁽¹⁾

不均等な色をした円形の平面を私達は均等な色の球体と判断する。それは、「凸面の物体が私達のうちに常にどのような外観を呈するのか」、即ち「物体の可感的な違いによって光の反射にどのような変化が引き起こされるのか」という経験をしているからである(同)。生来の盲人も、触覚でなら立方体と球体の区別はできる。それもまた、「いかにして球体が、そして立方体が触覚に作用を及ぼすか」という経験を「しているからである」。

②それが判断を可能にしていることは気付かれない。

経験が判断を可能にしても、人々は経験を「少しも利用しないと、あるいはその恩恵に浴さなまいと思つてい(12)る」。働いていても気付かれない。これも「経験」の特徴である。

③それは反復によって形成される。

凸面の物体が私達のうちに呈する外観、あるいは物体の可感的な形の違いが引き起こす変化を単に知覚しただけでは、判断を可能にする経験は形成されない。経験が形成されるためには、そういう外観、そういう変化を「知覚することになじんで」(同)いなくてはならない。「なじむ」ためには、それらを反復して知覚する他ない。それが「慣れ」であり「不断の習慣」である。盲人の例についても同じことが言える。

以上の三つの特徴を持つ「経験」の概念が、バークリに於ても、ひとつの役目を果たすことになる。

二 バークリの「経験」

ロックの物質論、あるいは抽象観念説を批判する一方で、バークリがロックに賛意を表しているところが『新論』にある。そこでは、モリニュークスに同意するロックの文が引用され、それはバークリの「教義 (tenet) をさらに

確証するもの」となっている (§132, 133)。

可視的 (visible) な四角と可触的 (tangible) な四角が数的に (in numero) のみ異なっていて、種的には (specifically) 異なっていないとすれば、視力を得た盲人はどちらが立方体でどちらが球体かを視覚のみによって知ることが出来るはずである。しかし彼は視覚のみによっては立方体と球体が区別できない。それゆえ、可視的な四角あるいは円と可触的な四角あるいは円は数的にのみならず、種的にも異なっていないとはならない。そうパークリは論じる。従って、パークリが依って立つ「教義」は次の二つになる。

- (n) いかなる事物についても、視覚の対象となっているものと触覚の対象となっているものは数的に別個である。
- (s) いかなる事物についても、視覚の対象となっているものと触覚の対象となっているものは種的に別個である。

(n) の証明のために、パークリは「月」の例を用いている。⁽¹³⁾ 月を見て、『それは私から遠く離れている』と言ったとき、それは「小さくて光る平面」(可視的な月) について言われているのではない。「小さくて光る平面」は、私がそれへと向かって移動すれば、変化し、遂には消えてしまう。そこで言われている月はむしろ巨大で不変なものである。そうパークリは考える。これを(n)の証明としてパラフレーズすれば、次の様になる。⁽¹⁴⁾

- (i) もし私が見ているもの——可視の対象が、私から遠く離れた対象と同一であれば、私が移動しても、それは変化しないはずである。

- (ii) なぜなら、私から遠く離れた対象は、私が移動したからといって、変化することはないからである。

- (iii) ところが、私が移動すれば、可視の対象は常に变化する。
- (iv) ゆえに、可視の対象と遠く離れた対象は同一でない。
- (v) 遠く離れた対象は触れることのできる対象——可触の対象である。
- (vi) 従って、可視の対象と可触の対象は数的に同一でない〔n〕⁽¹⁵⁾。
- (s)の証明は、バークリの記述 (§129, 130)をパラフレーズすると、次の様になるはずである。⁽¹⁶⁾
 - (i) 色は視覚によって知覚される (§130)⁽¹⁷⁾。
 - (ii) 色は触覚によって知覚されない (§129)。
 - (iii) 可触の対象は触覚によって知覚される。
 - (iv) 可触の対象は視覚によって知覚されない (§130)。
 - (v) 色以外に可視の対象はない (§130)。
 - (vi) ゆえに、可視の対象と可触の対象は種的に異なる〔s〕⁽¹⁸⁾。

この結論(s)を「さらに確証するもの」としてバークリはモリニクス問題に言及した。もし視覚の対象と触覚の対象が数的にのみ異なる〔n〕のなら、視力を得た盲人は立方体と球体を区別し、どちらが立方体でどちらが球体か言えるはずである。しかし彼にはそれが言えない。それゆえ視覚の対象と触覚の対象は種的にも異なる〔n〕と想定せざるを得ない。⁽¹⁹⁾

かくして視覚の対象と触覚の対象は数的かつ種的に別個となる。ただ『新論』ではバークリはこの二種の対象を視覚観念および触覚観念と呼ぶ。⁽²⁰⁾ この互いに数的かつ種的に別個な「視覚観念」および「触覚観念」と、そして

「経験」概念を用いて、バークリは『新論』で奥行き⁽²¹⁾、大きさ⁽²²⁾、位置を分析する。なかでも、奥行きについては、ロックの影響は両概念の峻別と「経験」概念にとどまらない。ロックがモリニクス問題を持ち出したのは、いかにして不均等な色をした円形の平面を均等な色の球体と判断するようになるかを説明するためである。言い換えれば、凹凸のないもの(視覚観念)をなぜ凹凸のあるもの(触覚観念)と判断するかを説明するためである。そしてその説明のために視覚と触覚の経験に訴えざるを得なくなった。⁽²⁴⁾ここからバークリの「奥行き」論への道程はそう長くない。⁽²⁵⁾「色の多様にすぎず」(『新論』§158)奥行きのない視覚観念のうちに私達はいかにして奥行きがあると判断するようになるか、というのがバークリの「奥行き」論だからである。

『新論』(1709)の「経験」によって、『原理』(1710)で世界の実在性が物質抜きに裏付けられることになる。物質を消去したバークリは、私達の世界が実在的であることの抛り所を観念に求める。そして抛り所のひとつとして、「定常性、秩序、そして一貫性」という観念間の特性を挙げる。それらは「自然の法則」と呼ばれ、学ぶのに経験を要する(§30, 31)。また、「経験」は「一般的な名前(general name)」についての説を支える。バークリによれば、「言葉というものが一般的となるのは、抽象観念の記号ではなく、複数の個別観念の記号となって、そのどれをも無差別に心に示唆することによる」(intro. §11, cf. §12)。言葉が複数の個別観念の「どれをも無差別に心に示唆する」ようになるには、(バークリ自身明言していないが)経験が要る。

さらに「経験」によって、『対話』(1713)で間接知覚の説が展開される(p. 204)。直接的にはある種の音しか知覚していないことも、間接的には馬車を知覚していると言うことができる。ある種の音と馬車が経験によって結合して、音が馬車を「示唆する(suggest)」からである。同様に、赤く焼けた鉄の棒を見ているとき、直接的には

その色と形が知覚され、間接的にはその固さと熱さが知覚されている。この間接知覚の説は『新論』の説を拡張したものである。間接知覚の説から言えば、直接に知覚しているのは視覚観念にすぎないのに、間接的には、奥行、大きさ、位置という触覚観念を知覚している、と主張したのが『新論』であった。『対話』になると、直接知覚の対象が聴覚観念（音）で間接知覚の対象が視覚観念と触覚観念の複合体（馬車）という具合に他の種類の観念に及ぶことになる。赤く焼けた鉄の棒の例も、視覚観念と触覚観念の間でのことであるが、触覚観念の方は『新論』にはなかった固さであり、熱さである。ただこのような間接知覚の説も対話篇の台詞として一度登場しただけで、充分に展開されることはなかった。

三 経験と必然性

ロックはモリニュークス問題を通して単にひとつの「経験」概念を示唆しただけではない。モリニュークス問題が書き加えられたのは『知性論』第二版（1684）のことであるが、すでに第一版（1680）の段階でロックはこの「経験」概念を自身の知識論に取り込んでいる。⁽²⁶⁾むしろ「経験」概念が自身の知識論に肝要だったがために、ロックはモリニュークス問題を取り上げたとも考えられるのである。

ロックにとって、知識とは観念の一致不一致の知覚である（IV, xviii, 14~7）。観念を直接に比較できるとき、直観的知識が得られ、直接に比較できないときには、他の観念を介在させることによって論証的知識が得られる。そしてこの二種の知識のみが確実性を有していて、しかも厳密な意味での知識とされる。しかし比較という方法に基づかなくとも、経験をを用いることで、知識に匹敵するものが得られる。例えば、『火は人間を暖め、鉛を液化し、

木や木炭の色とか固さを変える』とか、『鉄は水に沈み水銀に浮く』⁽²⁷⁾というような命題がそれである。これら⁽²⁷⁾の命題には蓋然性しかない。しかし、

「それらの蓋然性は確実性にきわめて接近しているので、最も明白な論証と同じくらい絶対的に私達の思惟を支配し、同じくらい完全に私達の行動すべてに影響を与える。そして自分達にかかわることに於て、私達はそれらの蓋然性と確実な知識を殆ど、あるいは全く、区別しない。以上の様に根拠づけられた信念は確信⁽²⁸⁾に達する。」(IV, xvi, 6 ; cf. xv, 1, 5 ; xvii, 16, 17)

つまり経験は直観的知識や論証的知識の「確実性」を有すると間違われるほど緊密な観念結合を生む⁽²⁹⁾。従って、経験による観念結合は厳密な意味の知識と区別できないほどのものとなる。この意味で、ロックは「経験」概念を自身の知識論に取り込まざるを得なかった。ただここでの「経験」は広く、「経験についての他人の証言」も含まれるが、しかしその点を除けば、知識論の「経験」とモリニュークス問題の「経験」はほぼ等しく、ロックは知識論のゆえにモリニュークス問題に着目したとも考えられるわけである。

ロックの「確実性」に位置するのが、パークリでは「必然性」⁽³⁰⁾になる。パークリは言う。

「また(視覚観念と触覚観念という)非常に異なった観念の結合にひとつの同じ名前を与える理由を見つけることは、そういう観念の共在を経験する以前にいかにして可能なのか。あれこれの可触的性質とどんな色の間にも必然的結合があることを私達は見出さない。そして私達は、時には、触れるものがない所に色を知覚することもしれない。」(『新論』§ 103)

要するに、視覚観念と触覚観念の間には経験による結合があるのみで、必然的結合というものはない。さらに具

体的に「大きさ」についてパークリは言っている。

「私達が外的対象に触れる前に、その様々な大きさをいま私達に示唆している観念はそのような大きさを示唆しなかったかもしれない。あるいはそれらの観念は全く反対の仕方で大きさを示唆したかもしれない。それゆえ、私達はある観念を知覚してある対象が小さいと判断するが、その同じ観念が、『その対象は大きい』と私達に結論づけさせる役目を果たしたことも充分あり得る。」(§64)

ここで「大きさ」を示唆する観念は視覚観念のみではなく、他に、眼球の向きから生じる感覚 (§16)、眼の緊張 (§27) も、含まれる。あえて視覚観念を中心に言えば、視覚観念が、他の観念の協同のもとに、現に示唆しているのとは異なった可触的な大きさ(触覚観念)を示唆することも、また他の観念の協同にもかかわらず、可触的な大きさを全く示唆しないことも可能であった、ということになる。視覚的な大きさが、現に示唆している通りに触覚的な大きさを示唆しているのは、「全く習慣と経験の結果であり、外的で偶然的な状況に依存している」 (§104)。

このことは、「大きさ」のみならず、一般に視覚観念と触覚観念について言われる⁽³¹⁾ (§45)。つまり、視覚観念と触覚観念を結合する経験は反復によって形成されている。これはモリニークス問題での経験の第三の特徴であった。また経験は視覚観念と触覚観念を緊密に結合する。そのために、触覚観念が視覚観念によって得られるという先入見、パークリが言うには、「最も明晰な論証にも殆ど譲らないほどに私達の心になじみ、凝り固まって根深い先入見」 (§146) が生じる。そしてその先入見のために、奥行き、可触的な大きさ、可触的な位置が視覚の対象であるかのように、触覚観念について様々な判断を行うことになる。つまり経験が判断を可能にする。これは経験の第一の特徴である。またパークリは次の様にも言っている。

「私達が眼を開けば、奥行き、物体、可触的な形の観念が眼によって示唆されないことはない。可視的観念から可触的観念への移行があまりに速やかで急でしかも知覚されないの、私達は両観念を等しく視覚の直接対象だと考えざるを得なくなる。」 (§145; cf. §17, 23, 24, 26)

視覚観念から触覚観念への移行は知覚されない、つまり経験の働きは気付かれない。これは経験の第二の特徴であった。

要するに、先の三つの特性を持つ経験が、視覚観念と触覚観念の間に、必然的結合に迫る強い結合を産み出していることになる。⁽³³⁾

四 経験と知識

視覚観念と触覚観念の必然的関係の分析などのために、パークリは「経験」概念を活用した。しかしパークリは「経験」概念について、必然性について語ることはなかった。さらに言えば、経験および必然性が知識にとってどういう意義を持つか論じようとしなかった。つまり、ロックがしたこと、あるいはロックならしたはずのことをパークリはしなかった。それは、端的に言って、ロックとパークリとは「知識 (knowledge)」あるいは「知る (know)」の意味が違うからである。ロックは知識を観念の一致不一致の知覚と考えているのに対し、パークリはそうは考えていないからである。

ロックも当初は「知識」を観念の一致不一致の知覚とは考えていなかった。⁽³⁴⁾ 知識というのは物的あるいは心的存在についてのもの——いわば事物についてのものと考えていた。しかしそれらは(複雑)観念を通して知られる必

要がある。ところが観念がそれらの存在を完全にかつ充分に表しているかどうか知ることができない。つまり、知識を事物についてのものと考える限り、懷疑論に陥る。恐らくこのことに気が付き、ロックは「知識」の定義を変更して、知識は事物についてのものではなく、観念相互の間に成り立つとしたようである。⁽³⁵⁾

主著と目されている書物は『人間知識の諸原理に関する論考』（『原理』）であるが、バークリに知識の定義を見出すことはできない。しかし『原理』の知識が事物の知識なのはほぼ明らかである。というのも、『原理』には知識を観念間のものと考えていた形跡は見当たらず、しかもバークリは知識の対象を総称して「観念と精神」であると言っている。⁽³⁶⁾ (§ 86, 88, 89, 135, 145; 『運動について』 § 21) からである。無論バークリはロックの知識論を知らなかったわけではない。⁽³⁷⁾ バークリがロックの知識論を知った上で知識を観念の一致不一致の知覚としなかった。それは『評註』や『原理』序論の第一草稿といった下書きに窺える。

言辭的命題 (verbal proposition) と心的命題 (mental proposition) というロックの区分 (W, V) に基づいてバークリは『評註』に次の様に記している。

「Mo. 四種類の命題がある。

Gold is a Metal,

Gold is yellow;

Gold is fxt.

∧ Gold is not a stone.

以上のうち第一第二第三のものは言辭的命題にすぎず、それらに対応する心的命題を持たない。」(793)

「Gold is not blue の様な非共存 (non-coexistence) の命題についても同じことが言える。」(793a)

言辞的命題というのは、「肯定文あるいは否定文で合わされたり分けられたりしている言葉、即ち観念の記号」であり、心的命題というのは、「私達の知性のうちにある観念が、言葉の使用なしに、観念の一致不一致を知覚する心によって合わされたり分けられたりしている命題」のことである(IV, v, 5)。心的命題を形成するには二つの観念が必要である。しかし、793の最初の三つの命題については、バークリの抽象観念批判からして、ひとつの個別観念しか形成されず、心的命題が形成できない。それゆえ、ロックの知識の定義に従えば、三つの命題は知識として成り立たないことになる。つまり、知識を観念の一致不一致という命題の形で考えることにバークリは意義を認めなかった。第四の 'Gold is not a stone' という命題については、793のコメントでもある793aの 'Gold is not blue' の様に心的命題が形成できない、とバークリは考えたかった様である⁽³⁸⁾。

『原理』序論の第一草稿になると批判はより明確になる。そこでバークリは 'Melampus is an animal' という命題を取り上げている。Melampus というのはある特定の犬の名前である。「観念の一致不一致によって命題を理解する」ロックであれば、この命題を個別観念と抽象(一般)観念の一致と見るはずである。しかしバークリはそうは見ない。

「またそれ (animal という言葉) はその命題ではいかなる観念も表していない。私がそれによって意義しようとしているのは、私が Melampus と呼ぶ個別的な事物は animal と呼ばれる権利を持つということにすぎない⁽³⁹⁾。そして私はどの人もこの易しい試みを行ってみるよう懇願する。どの人もただ自分の思惟から命題の言葉を追い払って、一方が他方に一致することを見出せるような二つの明晰で明確な観念が自分の知性のうち

に残るかどうか見てもらいたい。「Melampus is an animal」という言葉を全く考えないとすると、私の心のうちにはたったひとつの裸で曝し出された観念、つまり私が Melampus という名前を与えている個別観念しか残らないことを、私は明らかに自分自身のうちに知覚する。」(p.136)

「矛盾でかつ不整合」であるゆえに、抽象一般観念は心に形成することはできない、というのがバークリの意見である。そうすると、「Melampus is an animal」の「Melampus」が表す観念は存在するけれども、それとは別に「animal」が表すもうひとつの観念は存在しない。つまり、「Melampus is an animal」という言辭的命題はひとつの観念しか表さない。従って観念の一致不一致を要求する心的命題は形成できない。これが、バークリがロツクの知識の定義を受け入れなかった理由の最たるものだと思う。⁽⁴⁰⁾

ただ、『原理』序論の草稿ではこの様に心的命題の批判を展開しながら、公けになった『原理』序論にはそれに該当する所がない。それは多分バークリの関心のありかのせいである。『評註』には次の様にある。

「M 事物は観念と別個であるという想定はすべての本當の真理を追い払ってしまう。そしてその結果、全面的な懐疑論 (Universal Scepticism) をもたらす。というのも、すべての私達の知識と思考は私達自身の観念のみに制限されているからである。」(606, cf. 『原理』§ 86, 87, 88, 133)

バークリは観念「の外に (without) 」物質を認めたくなかった。認めれば、神の創造説に抵触する。物質が無から創造されたとは考え難いので、神の創造以前の永遠の昔から物質が存在するとされてしまうからである (『原理』§ 92)。しかし私達は観念の世界の外に出ることができないので、観念が正しく物質世界を写しているかどうか知ることができなくなり、懐疑論に陥る。つまり、『知識は観念についてのものである』という命題と『観念の外に

物質が存在する』という命題を併せて支持することで、懷疑論に陥る。懷疑論は聖書の真理を脅かす。このような宗教的観点から、パークリは懷疑論に重大な関心を持っていた。そして「知識は観念についてのものである」という命題を採り『観念の外に物質が存在する』という命題を捨てることによって、懷疑論を防ごうとしていた。そのためにもはや知識と観念より他に注意が注がれなくなつて(41)『評註』522, cf. 312, 378)の公けの著作では「観念の一致不一致の知覚」であるというロックの知識の定義に対するひとつの批判、即ち心的命題に対する批判が消えてしまつたのではないか。

あらゆる事柄について私達は確実な知識を持てるわけではない。人間の諸機能は「生活の用 (the use of the life)」に適えば充分であると、ロックは言う (IV, xi, 8, 10; xii, 11; xiv, 1, 2; cf. 『原理』§31)。蓋然性(IV, ix, 8~10)、そして経験はそのためにある。(42)視覚観念と触覚観念の結合もやはり「生活の用」のためのものである。というのも、私達の身体に利害を及ぼし、快苦を与えるのは殆どが触覚観念であり(『新論』§59, 147)、触覚観念を知覚する前にあらかじめ触覚観念について教えてくれるのが視覚観念だからである。確かに、視覚観念と触覚観念は同じ名前が当てがわれているので、言辭的命題が形成できず、それゆえに両観念の結合はロックの知識にはあてはまらない。しかし、視覚観念と触覚観念の結合も、ロックの言う知識と同じ様に、観念相互の関係である。従つて、ロックの知識の定義を拒否しなければ、『新論』の綿密な分析を生かして、一般的に、経験について、必然性について、そして蓋然性について論じる道がパークリに開けていたかもしれない。換言すれば、『新論』の心理学を哲学的に整理できていたかもしれない。(43)またロックの知識の定義は、良し悪しは別にして、パークリの観念論とも不整合にはならない。(44)結局、必然性、蓋然性、経験についての一般的な議論は、再び知識を観念の関係と考えたヒ

注

- (1) 使用したテキストはロッタ『人間知性論 (An Essay Concerning Human Understanding)』(大槻春彦訳『人間知性論 岩波文庫一九七二—七七年』(『知性論』)、『ハークリ』哲学評註 (Philosophical Commentaries)』(『評註』)、『原理序論』の第一草稿 (First Draft of the Introduction to the Principles)、『視覚新論 (An Essay Towards a New Theory of Vision)』(『新論』)、『人間知識の諸原理に因する論考 (A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge)』(大槻春彦訳『人知原理論』岩波文庫一九五八年)、『原理』、『ハイラスとトロタスの三つの対話 (Three Dialogues Between Hylas and Philonous)』(『対話』)、『運動の二つ (De Motu)』(『知性論』)、『評註』、『兼論』、『原理』、『運動の二つ』は節番号あるいは見出し番号を記し、それ以外の頁付は A. A. Luce and T. E. Jessop (eds.), *The Works of George Berkeley* (London, 1949—58) に従った。
- (2) *The Encyclopedia of Philosophy*, Empiricism (D. M. Hamlyn) p. 502.
- (3) ハークリの念頭にあったのはロッタだけであったとする証拠はない。『原理』の序論と本論を対照のこと。序論では名指しでロッタの抽象観念説が批判されているのに対し、本論では物質論一般が批判されている。
- (4) R. I. Aaron, *John Locke* (Oxford, 1971), pp. 96, 107, 110.
- (5) Aaron, *Ibid.*, p. 114.
- (6) 現代 'sensation idea' とはインフェーズが『原理』に類する。J. W. Yolton, 'Locke's Concept of Experience', in C. B. Martin and D. M. Armstrong (eds.), *Locke and Berkeley* (London, 1968) p. 45.
- (7) 抽象的ではなく、個々の事物の存在を考察した。『評註』597 拙論『物質論批判と esse is percipi』(『哲学論叢』第九号掲載) 参照。
- (8) ロッタは感覚と知覚を区別している。つまり、気付かれた感覚が知覚であるのに対し、気付かれない感覚は知覚でない (II, ix, 3; cf. 4)。しかし、観念の源となり得るのは前者であって、後者ではない。それゆえに、ここではロッタの「感覚」はハークリの知覚に相当する。

- (9) 『註』279『原理』§3。
- (10) II, ix, 8. ロックの「経験」はたゞ他の意味があるかも知れないが、ロックの「経験」の意味を尽くすことは本論の目的ではない。ヨルトンは他に心の作用を考へてゐる。Yolton, *ibid.*, p.50.
- (11) 知識論との関連については Aaron, *ibid.*, pp. 248~9 参照。
- (12) それがまた記憶による判断と経験による判断を区別してゐる。なぜなら、経験による判断が経験によつてゐることは気付かれなうのに対し、記憶による判断が記憶によつてゐることは気付かれなうからである。I, iv, 8. cf. D. Hume, *A Treatise of Human Nature*. L. A. Selby-Bigge (ed.), revised edition (Oxford, 1978), p.103~4, 92.
- (13) §4. G. Pitcher, *Berkeley*, (London, 1977), p.26.
- (14) cf. *ibid.*, pp. 26~7.
- (15) 『新論』第二二二節を境として、それまでが(11)の議論、それ以降が(9)の議論になつてゐる。
- (16) cf. Pitcher, *ibid.*, p.54.
- (17) 原文は「厳密に言へば、私は様々の陰影と変化を伴つた光と色以外の何も見ない」である。ちやうど同節では *esse* と *percipi* の抽象不可能性を論じるときと同じ仕方であり、色と可視的延長の抽象不可能性を論じてゐる。
- (18) この証明の問題点については Pitcher, *ibid.*, pp. 54~5 参照。
- (19) 「ピッチャーはこの議論が(9)の証明の心づいてゐることをたゞまらうとする証明を指摘して、(9)の証明は註三(1)である」として、Pitcher, *ibid.*, pp. 53~8.
- (20) 視覚対象と触覚対象を数的かつ種的に分離しようという、クバークの発想自体ロックの観念説から来ている。つまり、どの単純観念も五つの感官の固有の対象 (proper objects) であるという前提がロックの観念説にあり、そこに(11) (9)の源を見出すことができる。(III, iv, 11; cf. 『新論』§46~9) 『新論』の「固有の対象」§43, 46~9, 116, 147, 156, etc.
- (21) 原語は 'distance' の『新論』第二一五二節で論じてゐる。
- (22) 同第五七~八七節で 'moon illusion' を中心と論じてゐる。
- (23) 同第八八~一二〇節で、倒立像を中心に論じてゐる。

- (24) 「パークリによつては、モリニュークス問題の検討が網膜の倒立像の問題になつてゐる。」M. J. Morgan, *Molynaux's Question* (Cambridge, 1977), pp. 61~2.
- (25) Aaron, *ibid.*, p. 135.
- (26) 『知性論』の構成という観点から言へば、第二巻でモリニュークス問題によつて「経験」概念を示唆し、第四巻でそれを自身の知識論に取り込むという恰好になつてゐる。
- (27) ロックは自然の斉一性を認め、そして自然が斉一的なのは神のせいだとしてゐる。ただ、私達は自然の斉一性について「経験的な知識 (experimental knowledge)」しか持たない (IV, iii, 30)。
- (28) さわめて高く蓋然性の知識を有するところの主観的狀態が「確信 (assurance)」である。より低い状態もロックは整理してゐる (IV, xvii, 7~9)。
- (29) 「II, xxxiii では、ロックは観念連合を正常でない推理にしか適用してゐない。」Aaron, *ibid.*, pp. 141~2.
- (30) 実体によつていう性質が共存してゐるかを知るのは、性質の観念の結合を経験することによるのであり、性質の観念の必然的な結合は知ることができない、とロックは言う (IV, iii, 14; cf. IV, iv, 12)。ロックがそう言うのも、観念間に必然的と間違われるほどの強い結合を経験が生むからではないか。ロック自身、図らずも、実体に「確かな知識 (certain knowledge)」が得られると言つてゐる (II, xii, 9)。同じコンテキストの第二版 (IV, iii, 16) で経験を強調してゐるのにも注意すべきであらう (cf. IV, xii, 9)。また心身の間にも「恒常的で規則的な結合」はあるが、必然的なものはなく、とロックは言つてゐる。
- (31) 「可触的四角には可視的の円より可視的四角の方がよさわしいとする点で、パークリにも合理論的要素は残つてゐる。」Aaron, *ibid.*, pp. 135~6.
- (32) 先に引用した『新論』第一〇三、一〇四節で言及されている。
- (33) 視覚観念と触覚観念の結合は単に強力なだけではない。結合の仕方についても、個人間のみならず、民族間、国家間に差異はない。要するに、結合の仕方は普遍的と言へる。そう言へるのは、パークリによると、視覚観念が神の言語だからである。つまり視覚観念は「記号」であり、触覚観念はそれによつて「意義されるもの」なのである (『新論』§ 143, 144, 147, 148, 152)。しかしどういふ視覚観念とどういふ触覚観念が結合するかはあくまで人間の経験に依存する。なぜ結合の

- 仕方がどの人間も同じになるか、ということの根拠としてのみ、つまり普遍性の根拠としてのみ神の言語には意義がある。
- (34) *Draft A of Locke's Essay Concerning Human Understanding*, transcribed with Critical Apparatus by P. H. Niddich (Sheffield, 1980), Aaron, *ibid.*, pp. 227~8, cf. p. 224, 227.
- (35) ロックに代わる「知」を「残」(residue) (Aaron, *ibid.*, pp. 204~1)。そしてその対象は自我、神、可感的事物である (*ibid.*, pp. 244~7)。
- (36) ただ、クリバークは「観念を知る」の「知る」と「精神を知る」の「知る」と意味が違うと言っている(『原理』§142)。
- (37) 『註』312, 378, 522, 606, 666, 720, 730, 730a, 739, 793, 793a, 883.
- (38) この二つの命題が互いに観念の不一致にならぬか判らぬ。あるいは、その前の二つに特別な意味があるのかも判らぬ。cf. 53, 53a, 429, 429a.
- (39) ロックの『知性論』では、二つの抽象観念を結び付けた場合、そういう意味になる(IV, viii, 12)。
- (40) 草稿の段階では、クリバークは知識を命題と考えていると見られる(『註』720)。また『原理』序論にもロックの知識の痕跡のようなものがある (§22)。
- (41) 知識を観念の関係と考えたことでも、それが観念についてのものである限り、ロックは懐疑論を免れぬ。Aaron, *ibid.*, pp. 237~40. cf. J. D. Mabbutt, *John Locke* (Macmillan, 1973), pp. 90~1.
- (42) 「観念」という言葉も理性の所産である。理性の権利を縮小した経験論者も全く理性から自由というわけではなかった。おまけに「観念」の使用は「新論」の業績を見えなくせよとするように思える。Pitcher, *ibid.*, pp. 29~34, esp. p. 32. ただロックの言う理性は広く probability を含める(IV, xvii, 2)。
- (43) 因果だとして、sign-signified を置かざる。『原理』§65, 66.
- (44) 「ロックの知識論と経験論は不整合にならぬ。」Aaron, *ibid.*, p. 224.

付記 本稿は日本哲学会第四十六回大会(一九八七年五月二十三、二十四日慶応義塾大学)に於ける一般研究発表に加筆したものである。

(追手門学院大学非常勤講師)